

# 『伊曾保物語』の文体再考 ―天草版・国字本の比較から―

磯貝 淳一

## 一. 問題の所在と研究の目的

『伊曾保物語』は伝存する本文に二系統、ローマ字表記による天草版（エソポのハブラス、文禄二年刊）と漢字平仮名交り表記による国字本（古活字版・慶長く元和年間刊、万治絵入本・万治二年刊）とが存する。日本語史研究では、特にローマ字表記の特性を活かし、「天草版」を対象として室町時代後期の音韻史・文法史の研究が進展してきた。また、「天草版」⇨口語文調、「国字本」⇨漢文調といった文体基調の観点から文体史上の位置づけを探る研究も進められている。このアプローチにおいては、語彙論的な観点からの位相差を見る研究が多く、両本の文章の構造を解明し、日本語文章史に位置づける研究は少ない。

本研究では、『伊曾保物語』天草版・国字本（古活字版）の文体について、文章構造の面から明らかにすることを目的とする。その一階梯として、接続詞の使用及び話末評を導く形式の調査から両本の文章構造の解明・比較を行う。以上の検討は両本に共通話が認められる寓話（作り物語）部を対象とし、両本共通の二五話における調査を中心に行う。

## 二. 天草版と国字本の文章構造

### 二-1 接続詞の使用について

天草版・国字本における接続詞の使用について、用法とともに

まとめたのが表一である。両本の寓話（作り物語）の文章は、〈說話部〉⇨〈話末評〉という基本的な構成からなる。この文章中のどの位置で接続詞が使用されているかについて分類を行った。また複数の使用が認められるものについては用例数を算用数字で示した。概観を行うと次のようになる。

①比較対象とした全二五話中、接続詞の使用をみるのは、天草版が九話（一九例）、国字本が一五話（二三例）。国字本が若干使用数が多い。ただし、接続詞が主たる文章展開を担っていない（使用されない）話もある。

②接続詞の種類と出現位置の関係において、「しかも」「しかるに」「しかるを」「しかのみならず」「しかれども」の接続詞は、両本ともに地の文・会話文問わず使用されている。一方、「さて」「されども」「されば」等の接続詞は、天草版では地の文・会話文を問わず認められ、国字本では会話文のみで使用される。

③「理由」の用法を担う「かるがゆゑに」は、国字本のみが使用している。一方、天草版の同文箇所では、接続助詞を用いた前件・後件の結合がなされる。国字本では、前件・後件の論理関係を明示しようとする傾向性を認めることができる。

④話末評部においては、国字本のみが接続詞を使用している。また、今回の検討から外したものに、接続詞としての独立性を認めるには問題を残す「そのゆゑは」「しっかりといへども」等の

接続を担う連語の使用も認められた。このことは③に関わって、特に話末評部における国字本の特徴を示している。

## 二二 話末評を導く形式について

前節では、『伊曾保物語』天草版・国字本の共通話二五話における接続詞の使用を概観した。ここでは接続詞をより積極的に使用する傾向から、国字本に論理関係を明示しようとする傾向性が認められることを指摘した。続いて、個別の語を離れ文章全体を比較するために、『伊曾保物語』の文章構造をつくる主要な要素である話末評を導く形式について考える。先に示した『伊曾保物語』の寓話（作り物語）部の基本的な構成は、より詳細に示すと以下のようなパターンを持つ。

### 国字本

あるとき（orさるほどに）…〈説話部〉そのごとく〈話末評〉

### 天草版

ある…〈説話部〉改行した改行〈話末評〉

国字本、天草版ともに説話のまとめとしての教訓的内容を持つ話末評に向けて話が展開する。「あるとき」「ある」から説き起し、話末評に至るが、そこで国字本は「そのごとく」、天草版は改行を前後に伴う「した改行」という異なる定型表現によって話末評を導く。両本は同一の説話内容を持ちつつも、表記はもとより語彙・文法等において異なる言語選択があり、それを背景として文体も異なったものとなっている。それに加え、話の終末部（話末評）を導く形式が異なることにより、両本が作る文章構造にも違いが認められることが分かる。

①国字本では、説話部と話末評の間の文章中に「そのごとく」が位置し、文章を断絶することなく、それ以前の文章（前件）をすべてひとまとめにして話末評を導く機能を担っている。

②天草版では、説話部が一端終了した後、謂わば小見出し的に「した改行」が配置され、それ以前の文章を終了させた上で、話末評を添加する機能を担っている。

話末評が視覚的に独立していることが明らかになる形式を持つ天草版に対して、国字本では、話末評は文章の中に完全に埋め込まれている。そこで、説話の「まとめ」と同時に話末評への「展開」を明らかにするものとして「そのごとく」が働くと認められるのである。

このような国字本の文章構造を支える「そのごとく」は、他にも見られるものだろうか。当該語について「大系本文（古典文学）データベース」(<http://base3.nijl.ac.jp/>)を使用して、五五六作品における調査を行った結果を表二に示す。全体では六九例認められるうち、『伊曾保物語』における使用が四九例を占める。また、他作品における「そのごとく」は、文章中にあって指示詞を含む接続表現として、前件の文脈を後件に持ち込んで展開させる働きを担う。

春日野の、飛ぶ火の野守出でて見よ、飛ぶ火の野守出でて見よ、若菜摘まんも程あらじ、そのごとく旅人も、急がせ給ふ都を、いま幾日ありて改行。 （観阿弥関係の能 求塚）

基本的な機能は『伊曾保物語』における「そのごとく」と同様であるが、特定の場所に位置して、文章全体の構造を支える機能は認められないことが分かる。国字本は比較対象とした他の日本

語文とは異なる用語・文章構造を持つ可能性がある。天草本とのより詳細な比較とともに今後調査を広げていくこととしたい。

### 三. むすび

『伊曾保物語』の両本は、異なる文章構造を有している可能性を提示した。「かるがゆゑに」等「理由」の用法の接続詞使用、また話末評部における接続詞の使用などからは、国字本には前件・後件の論理関係明示の志向性がより強く働いている可能性が指摘できる。この点は、国字本の特徴である「そのごとく」による説話部全体を前件としてまとめた上で、話末評の後件部へと展開させる文章構造の有り様とも関わりを見せる。

また、両本の文体基調の問題と関わって、「サ」系接続詞と「シカ」系接続詞の使用において違いが認められた。「シカ」系接続詞が両本ともに地の文・会話を通じて使用され、「サ」系接続詞は、天草版では使用が全体に涉り、国字本では会話文に使用が限られていた。このことは、両本が大きくは和文脈／漢文脈の位相に位置づくことを確認するものであったが、他方、両文体を通じて基盤となる語彙の存在と文章構造をつくる上での両文体の違い分けという観点によって、より詳細な検討を加える必要性を感じさせるものであった。

今後は、話末評や教訓を中心的構造として持つ文章との比較を行い、当該ジャンル・文種の史的展開の素描を行うこととする。

#### 「調査テキスト」

○天草版伊曾保物語（江口正弘編『天草版伊曾保物語 影印及び

全注釈 言葉の和らげ 影印及び翻刻翻訳』新典社注釈叢書二一）  
○古活字本伊曾保物語（中川芳雄解説『古活字本伊曾保物語 国  
立国会図書館所蔵本影印』勉誠社）○大系本文（日本古典文学）  
データベース (<http://base3.nijl.ac.jp/>)  
「付記」本研究は、jsps 科研費 24330256 の助成を受けたものである。

表一

| 出現場所        | 諸本 | 使用数 | 接続詞の種類   |
|-------------|----|-----|--|
| 説話部         | 天草 | 8   | さて(転換)2、されども(逆接)、しかも(累加)2、しかるに(経過)、しかるを(逆接)、また(累加)                               |
| 地の文         | 国字 | 7   | かるがゆゑに(理由)2、しかも(累加)2、しかるに(経過)、しかるを(逆接)、また(累加)                                    |
| 説話部         | 天草 | 11  | さらば(前提)、されども(逆接)、さらば(前提)、しかのみならず(累加)、しかれども(逆接)、すなはち(同一)2、ただし(補説)、また2(累加)、または(選択) |
| 会話文<br>中心中文 | 国字 | 8   | あるいは(選択)、さて(転換)、さらば(前提)、しかのみならず(累加)2、ただし(補説)2、また(累加)                             |
| 話末評         | 天草 |     |  |
|             | 国字 | 7   | かるがゆゑに(理由)4、さらば(前提)、また(累加)2、   |

表二

| 作品        | 用例数 |
|-----------|-----|
| 観阿弥関係の能   | 1   |
| 曾我物語      | 1   |
| 宮増関係の能    | 1   |
| その他の能     | 1   |
| 大名狂言      | 3   |
| 小名狂言      | 1   |
| 伊曾保物語     | 49  |
| きのふはけふの物語 | 1   |
| 猫のさうし     | 1   |
| 浮世物語      | 2   |
| 鳴神        | 1   |
| ひとりね      | 1   |
| 玉くしげ      | 1   |
| 蘭東事始      | 1   |